

成人が必要とする ワクチン

生涯を通した予防接種の重要性

「喉元過ぎれば熱さを忘れる」とは、困難に苦しんだことでも、過ぎ去ってしまえば、その苦しさも簡単に忘れてしまうことを意味することわざだが、ワクチンの扱われ方にもそんな一面がある。予防接種を受けることで獲得される免疫は、将来の罹患するかもしれない感染症を予防してくれるので、接種を受けた個人はその恩恵を自覚することができない。接種を受けていない人と比較することで初めてその効果を客観的に確認することができる。つまり、普段から定期接種などで当たり前に使用しているワクチンで得られている恩恵を実感する機会はほとんどない。社会の衛生環境や医療体制が改善し、感染症の疾病負荷が軽減されると、ワクチン接種後の有害事象がよりクローズアップされるようになり、1990年代頃から続くワクチンの積極的な利用や開発を軽視する風潮は、ワクチンギャップなどの原因となり、現在もその影響が継続している。

ただし、新興感染症が社会問題化すると、既存のワクチンがないため状況は異なる。2009年に問題となった新型インフルエンザの流行では、結果的に病毒性が低く季節性インフルエンザと同様となったが、ワクチン活用の重要性が見直され、2013年度より約20年ぶりに予防接種法に基づく定期接種が大きく刷新されるきっかけとなった。そして、2020年初頭から始まった新型コロナウイルス感染症（COVID-19）パンデミックでは、改めて予防対策の必要性、ワクチンの重要性が再認識されることとなった。全成人が新たに開発された新型コロナワクチンの対象とされるなか、社会全体でワクチンの活用を改めて考え直し、今後の日常診療でも予防医療の在り方を見直すきっかけとしたい。

国民の総人口が減少に向かい、医療水準を維持するための費用捻出が毎年難しくなっている日本の医療において、予防医学の普及と費用対効果の高いワクチン施策の活用は重要な役割を担うと考えられる。一方で、医療従事者がその活用方法を知り、

日常診療でそれらの介入を働きかけていくことなしに、大きな成果を得ることは難しいだろう。

この特集を企画するにあたり、小児から大人までの予防可能な感染症を対象とした「Life course immunization」（生涯を通した予防接種）の必要性を具体的に理解できるよう、ワクチンを必要とする成人のグループと、成人が必要とする各ワクチンの特性の2つの切り口で、国内でワクチンを有効に活用されている専門家の先生方に執筆を担当いただいた。また、読者からよくある質問についても編集部事前に挙げていただき、特集のなかで回答できるように心がけた。

上述のように予防接種の活用には有効性と安全性の理性と知性による理解が求められる。本特集を通じて、より多くの医療従事者が、今後の日常診療において「成人が必要とするワクチン」を予防医療に活用するきっかけとなり、予防できる疾患の負荷軽減に繋がる一助となれば幸いである。



氏家 無限

国立国際医療研究センター国際感染症センター